

## 本年度ご退職の先生をお送りするにあたって

佐藤 春吉\*

本年度（2004年度）に、定年を迎えられ、我が産業社会学部をご退職される先生は、佐々木嬉代三教授、長崎孝教授のお二人です。以下、簡単ではございますがお二人のご業績を紹介させていただきます。

まず、佐々木嬉代三教授の経歴、業績について、ご紹介いたします。佐々木先生は1939年4月12日、大連でお生まれになりました。その後、京都大学文学部哲学科を卒業され、大学院で社会学を専攻され、同大学院で博士課程の単位を修得され、1971年1月、立命館大学産業社会学部に赴任されました。以後、我が産業社会学部で主として「社会病理学」を中心に社会学を専門に研究され、多くの学生・院生を育てられました。先生は教育・研究面での業績だけではなく、1990年には本学の教育開発研究所所長を務められ、95年から約4年ほど学生担当の常務理事として立命館学園・大学の中核の仕事を担ってこられました。引き続き99年4月から副総長、副学長として学園と大学の舵取り役を果たされました。対外的にも京都に立ち上がりました大学コンソーシアムの運営委員長として諸大学の連合体の諸事業に取りくんでこられました。そういう点では佐々木先生の本学におけるご業績は多大なものがあります。また、学外でも社会病理学会理事や、三重大学経営協議会等の委員、大学基準協会判定委員会の主査もされています。このように、大きなお仕事を担われながら、佐々木先生は大学院生や学生の教育についてなによりも力を尽くされ、親しまれ、優秀な卒業生を多数育ててこられました。

ご専門の社会病理学については、先生ご自身は、「佐々木社会病理学」というような言葉はもちろんお使いではありませんが、これまでのご業績から「佐々木社会病理学」とでもいえるような個性ある社会病理学の対象設定や方法論を生み出されていると思われます。先生の著書、論文はたくさんございますが、博士学位論文でもあります『社会病理学と社会的現実』（1998年）がそれまでの先生のさまざまなお考えを集約されたものとみる事ができると思います。佐々木先生は社会学では理論的にはデュルケムの研究をベースに出発されており、ベースのところにデュルケムがあると思います。デュルケムから、欲望と道徳、内発的な価値をめざす努力と規制、規範とのせめぎあい、正常と病理の相即的連関の世界を読みとっておられるように思います。近代化の過程の中で「アノミー」という、欲望と道徳のバランスが崩れていく事態を時代の危機として理解する、そこに先生

---

\*2005年3月31日まで、産業社会学部長

の視座があるかと思います。さらにそれをベースにしながら先生の仕事の中では、マートンなどの説を批判的にその中に入れて研究をされておられます。その視点から、実証的研究もさまざまな事例をもとに展開されておられます。とりわけ「佐々木社会病理学」といえる特徴は何かを考えますと、社会病理学研究に、「社会学的社会問題論」という視点を据えておられる点があげられます。社会学的社会問題論というのは社会問題、社会構造、マルクス主義的な資本主義分析をベースにして諸状況を客観的にとらえていこうとするものです。しかし、社会学的社会問題論は主体の行為の場面でどのような形で現れてくるかということがもっとも肝心の点であります。すなわち、道德と欲望とのせめぎあいが、一つの「ドラマ」として、ある人物の生の形の中にいかに現れてくるかということに目を向けて研究する、このような視点であると思います。人の生は、さまざまな形で社会状況と主体との間の錯綜する関連のなかにおかれており、そこに一つの「ドラマ」の展開があるということです。それを先生はゲシュタルト的な認知との関連でとらえたり、さまざまなきらびやかな刺激的な用語を駆使して分析されています。「悪のドラマ」を、すなわち、一人の人間の行為が思わず悪に陥ってしまった人の生きざまを批判的に見るだけではなく、社会状況のなかで翻弄され、抵抗する生のドラマとして見ていく観点が躍動します。近代から現代へと社会が変動するにつれ、貧、病、争といった客観的にとらえやすい社会病理の発生機序から、問題が、内面の方へとますます深化してくる現代的な社会病理現象への変化が起ってきます。佐々木先生の、ドラマとしての社会病理学の視点は、まさに、この新しい現代的な諸要素の分析の視点として深められております。そして、それをさらに「日常性の病理」という問題意識のもとに、開拓するというお仕事を、ある時期からやってこられたと思います。先生の社会病理学のドラマは、「悪のドラマ」もそうですが、一種の悪循環、本人は一生懸命努力しているのだから、なかなか報われずに裏目に出てしまうような、正義のつもりが、そうではなかったというような反転するドラマを丁寧に見つめる眼力のもとで分析されます。その中で正常と病理という、二元的に分かれる世界ではなく、正常の中に病理を含み、病理の中に正常の面を見ていくという弁証法的な視点の重要性が強調されます。このように、内側から反芻して病理現象への批判の視点ををとりえ返しながら、社会構造をも視野に組み込み、一つの現象を丁寧に追いかけていこうというところに、あえて表現させていただければ「佐々木社会病理学」の独自性があるという風にいえるかと思います。私も、専門が社会学であるということで、僭越ですが、少々内容的な紹介にも深入りさせていただきました。佐々木先生は今後とも、社会病理学研究を展開をされ、発展させていかれるだろうと思います。どうかお元気でご活躍され、我々後輩への、ご指導ご鞭撻のほどをお願いしたいと思います。

さて、次に、長崎孝教授の経歴、業績をご紹介します。長崎先生は1939年に京都府舞鶴でお生まれになり、1963年に京都大学文学部哲学科をご卒業され、数年を経て大阪市立大学大学院文学研究科に進学され、1976年、独文学専攻博士課程を単位取得されました。その後、大阪、兵庫で高校教諭の勤務のかたわら、龍谷大学などで非常勤の講師をされた後、1976年に本学部へ赴任され、以後、ゴットフリート・ケラーの文学研究を継続されながら、本学部学生を対象にドイツ

語教育に携わってられました。

その、ご業績の一端を紹介させていただきます。研究の面では「作品内在的に作品の解釈を押し進めていく手法」によって、ドイツリアリズム文学最高峰のゴットフリート・ケラーを中心にドイツ文学の研究を進められ、1981年、95年の2度、ドイツに留学をされ、京都ドイツ文学会、阪神ドイツ文学会、19世紀ドイツ文学会などでご活躍されてられました。『ドイツ文法の基礎』という共著の著作も出版されておられます。教育の面では、先生は、本学において、29年間の長きにわたって、初修外国語教育のために奮闘され、貢献をされてまいりました。「ドイツ語基礎」、「ドイツ語全解」、「ドイツ語総合1」、「ドイツ語表現」など、多くの科目をご担当され、教育に尽力されました。語学教育だけではなく、教養科目においても、「外国語文学1」、専門科目では、「異文化コミュニケーション」なども担当され、教養教育や専門教育にも力を発揮してられました。大学行政についても学部の学生主事、外国語連絡協議会の運営委員等を歴任されました。以上、長崎先生の経歴と業績についてかいつまんで紹介させていただきました。専門が、異なることもあり、私から、長崎先生のゴットフリート・ケラー研究等、その文学的なご研究の内容に関しましては、生半可のことを申し上げることは控えさせていただきます。先生には、長年にわたり研究、教育などさまざまな点で、ご教授いただきましたことを深く感謝いたします。本当にご苦勞様でした。ご退職後も、ご健康を維持され、ご活躍されますことを祈念しております。